



連携と情報発信で、 まちを笑顔に

～移転を機に“つながる”図書館を実践する滝川市立図書館～

2018年12月25日。取材でお邪魔した「滝川市立図書館」のカウンターでは、赤と白のサンタクロースの帽子をかぶったスタッフが迎えてくれました。クリスマスに合わせたちょっとした演出が、市民の心を豊かにしてくれます。そこに行くと、何か楽しいコトやモノ、情報がある。だから、ちょっと寄り道していこう…。そんな気にさせてくれる図書館です。

2011年11月に滝川市役所2階に移転し、丁寧な連携事業と細やかな情報発信を実践している、滝川市立図書館を紹介します。

移転を機に、必要なサービスを再構築

滝川市は人口約4万人。中空知エリアの10市町の中で、中心的な役割を果たしている都市です。30年ほど前から、スカイスポーツの振興や国際交流に取り組み、近年は菜の花畑やクラフトビールでも知られ、田園都市としての観光資源も蓄積されてきました。

滝川市では1962年に児童会館に図書室が設置され、1973年に滝川市文化センターに隣接して待望の「滝川市立図書館」が開館しました。しかし、2000年代に入って図書館の老朽化が目立つようになり、耐震強度やエレベーターがないなど、多くの市民が利用するには、時代にそぐわない建物の構造にも懸念が出てくるようになりました。また、当時の図書館は空知川の堤防沿いにあり、バス停留所がなく交通アクセスの不便さも指摘されていました。

しかし、改築するには多額の費用が見込まれます。そこで、既存の施設への移転が検討され、最終的に滝川市役所に移転することが決定しました。

既に竣工している市役所庁舎に図書館を移転することは、全国的にも珍しいことでした。市役所竣工時に図書館が入館する予定はなく、スペースの確保、書架を含めた重量制限など、いくつか突破しなければならない壁はありましたが、2階にあった税務課などを3階に、3、4階にあった部署を調整し、2階のスペースを確保することができました。

そもそも市役所は市民が訪れる機会があり、滝川市の場合はずぐそばに市立病院があるため、ついでに立ち寄ってもらうことができます。不要なランニングコストがかからない、行政内の他の部署との近さなど、メリットも多く、市役所はベストな選択でした。

一方で、閲覧室に配架できる蔵書は6万冊まで、吹き抜けがあるため1階の音や人の声が聞こえるなど、運営上の制約もありましたが、結果的に必要なサービスを見直すことにつながっていきます。

「移転に当たって、旧館時代の取り組みにこだわらず、どんなサービスがあれば喜んでもらえるかをゼロから



2019年のNHK大河ドラマ『いだてん』に合わせて関連書籍を並べた展示の前で、木村館長（右）と司書の深村さん

考え直しました。必要なサービスは残しながら、新たなサービスを積み上げていくことになりました」と、滝川市立図書館で30年近く司書ひと筋に取り組んできた深村清美さんは言います。

館内に入ると、市民の関心の高い健康や医療の書籍が並ぶ「いのちの森」コーナーが目飛び込んできます。「従来の日本十進分類法にこだわらず、利用者目線で本が探しやすいようにテーマ別に並べています」と深村さん。その先には実用本が並ぶ「くらしの森」



大人向けの「文学の森」コーナーは、「えほんの森」コーナーから一番離れた位置に配置

コーナー、さらに奥には小中学生向けの企画展示、その横に乳幼児向けの「えほんの森」と、お母さんと子どもが近くで本を選べるように配慮しています。旧館時代、子ども向けの本とお母さんが読みたい本が別フロアに配架されていたことから「親子で一緒に安心して本を選んでほしい」という思いを実行したのです。

図書館を“市民と行政をつなぐツール”に

図書館が市役所に移転し、行政各部との距離が近くなったことで行政との連携も始まりました。「公共施設の中で、図書館は最も敷居の低い施設。集客力が高く、誰でも来館できます。そこで、図書館を市民と行政をつなぐツールとして使っていただこうと考えました」と木村純館長は言います。

例えば、図書館前のロビーには行政情報コーナーが設けられ、暮らしの困りごとや福祉、学校や仕事など、自由に持ち帰ることができるパンフレットやチラシが

配置されています。また、入り口には「水道事業ビジョン(案)」が設置されていて、その場でパブリックコメントが提出できるよ

うになっていました。館内の壁などを利用し、市役所各部からのお知らせやポスターも貼られています。

市が主催するイベントがあれば関連書籍だけでなく、展示できる実物などを一緒に展示する「連携展示」を企画。2018年3月に観光国際課と北海道空知総合振興局が主催した講話会と料理教室の際には、講師の佐々木十美さんが監修した料理本のほか、空知管内の食材や加工品を展示し、市民の関心を高めました。

当初、市役所内の情報収集は、PR用のチラシを配布し、各部から情報提供してもらう想定でした。しかし、情報量が少なかったこともあり、図書館スタッフが情報をキャッチした時点で、「勝手にコラボ」と称して図書館側から展示案を提示し、関連する展示物を借用していくようになりました。図書館からの働きかけが市役所内部に広がり、関連する団体や組織とのつながりも生まれています。

また、健康診断や講座では図書館が関連本を持ち込み、イベントでは「出張おはなし会」にも対応しています。司書をはじめ館長自ら図書館を飛び出し、要請



図書館入り口に配置したパブリックコメントのコーナー。奥に貼ってあるすごろくは図書館スタッフの手作り。このすごろくは希望者に配布



管内の食材なども一緒に展示したスーパー管理栄養士の佐々木十美さんの講話会の展示

があれば、どこにでも出向いていく覚悟です。春に開催される恒例の「たきかわ菜の花まつり」では、開催1カ月前から菜の花の関連本やマップ、地元の菜種油の商品サンプルなどを展示するだけでなく、菜の花が見ごろの時期には、図書館スタッフが菜の花Tシャツを着用してPR活動に参加するなど、行政活動を支援しながら図書館の情報発信にも努めています。

地域の中で、さまざまな人や企業、団体と一緒に

滝川市立図書館の移転では、社会資本整備総合交付金を活用したこともあり、滝川駅や市役所を含む中心市街地のにぎわい創出という命題もありました。そこで、移転に当たっては、滝川商工会議所を通じて滝川市商店街振興組合連合会に図書館移設連携実行委員会の設置を依頼し、まちなかにおける連携のすがたを探っていきました。その中で浮き上がってきたことの一つが、情報発信です。



ロビーの「まちなか情報コーナー」

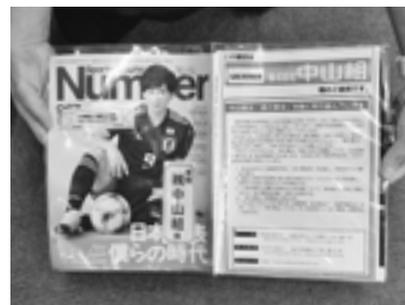
滝川市立図書館には、滝川市の店や工房、サークルや団体、イベント、そして人の情報が溢れています。例えば、ロビーの壁の「まちなか情報コーナー」には、ポスターやチラシを掲示。驚くのは、図書館のスタッフが自ら



観光客にも有益な「まちなかコンシェルジュ」。関連書籍も一緒に展示。右はバックナンバーファイル

取材してまとめた「まちなかコンシェルジュ」です。写真をふんだんに盛り込んだ顔が見える情報は、受け取る側に親しみを与えてくれます。過去に取材した情報はすべてファイリングしており、移転から継続して紹介してきた商店や人とのつながりを感じさせてくれます。今年度からは市民が活動しているサークルや団体を紹介、こうした情報を積み重ねることで、これまでの蔵書にはない資料価値が生まれてくるように思います。

また、図書館の活動が評価されていることを実感できるのが、130誌の雑誌が並ぶ「雑誌コーナー」。このうち72誌は「雑誌ささえ隊」と呼ばれるスポンサー制度によって、市内の企業や個人によって寄贈されたもので、雑誌数は旧館時代の5倍以上になっています。雑誌ささえ隊による当初の



「雑誌ささえ隊」から寄贈された雑誌のカバー裏には、スポンサーのチラシを挿入

目標数は30誌。口コミで市民にも広がり、購入後に自分が読んでから寄贈する個人スポンサーもいるそうです。

企業や団体から要請があれば、図書館の活用できる空間を展示スペースとしても提供しています。市内にある北海道新聞の販売店が企画した写真展「甲子園への軌跡」では、19年ぶりに夏の甲子園に出場した滝川西高等学校の奮闘を振り返るパネルを展示。市民の心に刻まれたひとコマを思い出させる、空間になりました。

これらの取り組みで地域の人たちとの信頼関係が築かれ、多彩な業種の人たちと一緒に開催するイベントも生まれてきました。夏休み期間中に市内の寺院との連携で開催された「夏の『こわ〜い』おはなし会&きもだめし」は、本堂での住職やボランティアの読み聞か



好評だった「夏の『こわ〜い』おはなし会&きもだめし」

せとお寺の中をめぐる肝試しを組み合わせたもの。「泣いてしまう子どもたちもいましたが、とても楽しい連携イベントになりました」（木村館長）と、図書館スタッフが楽しみながら企画段階から関わっている様子が見えがえします。

子どもの読書普及活動もつながりを生かして

滝川市立図書館では、旧館時代から子どもの読書普及に積極的に取り組んできました。その蓄積もあり、移転後の2013年度には「子どもの読書活動優秀実践図書館」に選ばれています。

乳幼児の絵本との出会いの場づくり、おはなし会、各種イベント、移転を機に廃止した移動図書館車に代わって保育所や託児所、学童クラブなどの団体や施設に本を貸し出す「まごころ本箱『はこぶっく』」など、多彩な活動を続けています。

市内に10校ある小中学校には、年4回図書館の本を運び入れ、体育館などで平置きにした中から子どもたち自らが本を選んで学級文庫を作ってもらいます。この「図書館学級文庫」は自分で選ぶ参加意識が生まれ、



「図書館学級文庫」の本を選ぶ子どもたち

読書推進につながっているほか、本を介した子どもたち同士のコミュニケーションにも一役買っています。

市内の全小学生に配布されている「読書アルバム」は、100冊まで読んだ本を記入すると表彰されるもので、旧館時代から続いています。2017年度には2,700冊もの本を読破した子が登場するなど、子どもたちにも図書館の努力とその熱意が伝わっているようです。

また、夏休みに合わせて開設する「読書感想文におすすすめ!」では、地元資本のフランチャイズ「TSUTAYA 滝川店」と連携し、図書館と同店にそれぞれコーナーを設置し、おすすめ本を紹介しています。図書館にある本は冊数が限られているため、書店での販売促進になったようで、図書館と書店の有効な関係づくりにつながっています。

夏休みの自由研究向けには、「滝川市美術自然史館」「滝川地区地域防災施設（川の科学館）」「B&G海洋センター」「たきかわスカイミュージアム」と一緒に、「たきかわDE調べる学習体験講座」を実施。子どもたちは、川、空、自然の中から好きなコースを選んで体験しながら学ぶことができます。それぞれの会場に関連する書籍を持ち込み、市内にある多彩な施設と連携しながら、子どもたちの教育を支援しています。

能動的に発信する図書館

これまで紹介してきた滝川市立図書館の取り組みは、ほんの一部でしかありません。選書や蔵書管理、貸出、レファレンスなどの業務に加えて、年間で展示の企画だけで200件以上、館内外でのおはなし会や読み聞かせ会、学校図書館運営支援など、さまざまな仕事をこなしています。

また、コミュニティFM「G'Sky」の番組内で新十津川町図書館と交代で本や行事などを紹介している「小さな図書室」、地元紙「プレス空知」の「絵本deビブ



地域情報サイト「まいぶれ滝川」とのコラボコーナー

「リオバトル」の掲載、地域情報サイト「まいぶれ滝川」の「今日は何の日?!」コーナーなど、地元のメディアともコラボレーションし、それ

ぞれの媒体で情報を発信しているほか、館内に関連する本やチラシを常設展示し、相乗効果が生まれるような発信をしています。

「また来てみたい、おもしろかったと思ってもらえるようにいろいろな情報が図書館にある、地域の情報拠点となる図書館を目指しています。旧館時代に比べると市民の皆さんの反応の変化を感じます。あの企画はよかった、あの展示はおもしろかったなど、たくさん声をいただくようになりました。これは大きな進歩です。図書館はお客様の反応を直接肌で感じるができる施設で、職員の励みになっています。図書館の可能性を感じます」と木村館長。

深村さんも「図書館を介して、市民の皆さんに笑顔の連鎖が起きているように感じます。この連鎖を広げていきたい」と、次に離れたまちの図書館との連携の種をまいています。移転に当たって視察をした、交流のある帯広市図書館に展示企画を提案したのです。2017年9～11月に滝川市立図書館が実施して好評だった「BOOKセラピー～あなたを癒やす処方箋～」の展示を紹介し、同じ企画展を帯広市図書館で行ってもらうことになりました。さらに、SNSのフェイスブックで紹介すると、その輪が広がり道内外の26館（2019年2月2日現在）でBOOKセラピーの展示が行われることになり、滝川市立図書館でも1月25日から3月27日まで、第2弾の展示を行っています。

「お互いにアイデアを共有すれば、離れていても図書館同士で一緒にできることがあるのではないかと思います。アイデアや制作物など共有できるものがあれば、積極的に提供しています。協力は惜しみません。全国の図書館の皆さんと一緒に元気や笑顔をつないでいきたい」と思いを語ります。こうした考え方は、図書館職員の負担軽減や新しいアイデアを生み出すことにもつながるでしょう。

印象的なのは、忙しそうなるすべての業務を本当に楽しんで実践していること。話をしているだけで図書館のスタッフがワクワクしながら毎日を過ごしていることが伝わってきて、そこから図書館の可能性が広がっているように感じます。また、これまでの経験と蓄積など、今ある図書館の資源を生かしながら、スタッフの創意工夫で魅力を生み出し、まちづくりや図書館の活性化など、地域の好循環を生み出すことにつながっているといえるでしょう。

もちろん事業のスクラップ&ビルド、選書のバランス、滝川市の図書館としての特色を次の世代に引き継いでいくことなど、今後の課題もあります。これらの課題にもスタッフの積極的な意欲で取り組んでいくことが期待されます。

前田康吉市長は「司書をはじめ図書館のスタッフの自主的なアイデアと実行力によって、市民の応援団の輪が次第に広がっている」と、地域の資源として図書館が市民の中に広く認知されてきている手応えを感じています。

滝川市立図書館の取り組みは、これからも新しい“つながり”を創出し、まちの魅力を増していくように思います。



市民に図書館の応援団の輪が広がっていると話す前田市長